

更年期障害 症例 2

女性 五六歳 養殖業経営

主訴 左背部、両肩から上腕にかけて痛み、だるさ。

現症 肩甲骨内側から上腕にかけての痛み、左第三、四指シビレ、右第三指から五指にかけてシビレ、寝つきが悪い、夜になると咳き込む、両下肢のだるさ、坐骨神経痛、頭痛持ち。

現在、更年期症の薬（エストロゲン製剤、精神安定剤、自律神経調整剤、加味逍遙散等）服用中。閉経は四八歳。転医加療するも無効。

所見 「弱・短・緊」_レ「腹部全体」が硬化。「中注」(+)_レ「気海」(+)_レ「右天枢」(+)_レ「火穴」(-)_レ「やや頭部瘀血」_レ。

治療 「扁桃」_レ「強心処置」_レ「瘀血」_レ「頭部瘀血処置」_レ。

経過 二回目（四日目）だいぶ体に力が入ってきた、あまりきつくない、両肩から上腕にかけて痛む。臀部痛。「やや弱短」_レ「腹部」軟らかいし、圧痛あまりなし。「扁桃」_レ「瘀血」_レ「強心」_レ「帯脈」_レ「左魄戸・膏肓」に皮内鍼。

三回目（三八日目）一ヶ月あき。疲れがたまり食欲なし。肩から上腕痛む。「弱短」_レ「火穴」(+)_レ「腹診」(すべて+)_レ「左中注」(+)_レ「天牖」(+)_レ「扁桃」_レ「強心」_レ「自律神経」_レ「瘀血」_レ「帯脈」_レ。

四回目（四二日目）体の重だるいのがだいぶ楽になってきた。食欲少しずつ出てくる。左肩から上腕痛。「沈遅」_レ「右天枢」(+)_レ「左中注」(+)_レ「扁桃」_レ「瘀血」_レ「帯脈」_レ「副腎処置」_レ。

五回目（五六日目）全体的にだいぶ良くなってきた。眠りもよい（四回目以降、安定剤服用せずに眠れる）。右肩痛、腰痛。「沈遅」_レ「扁桃」_レ「帯脈」_レ「副腎処置」_レ。「京門・左魄戸・左膏肓」に皮内鍼固定。

八回目（一〇五日目）全体的にずっとよい。眠れる（薬服用せず）肩こり、腰痛、頸から頭にかけて重い。「沈遅」_レ「右天枢」(+)_レ他は(-)_レ「行間」(+)_レ「扁桃」_レ「副腎処置」_レ「肝気水処置」_レ「肺実」_レ「帯脈」_レ。

自営のため忙しく、その上遠方なので頻繁に來れないが、継続治療中。

考察 この二人はともに脈状が「弱短」であった。この脈は疲労困憊、全身倦怠、虚血性心疾患を現します。

「極めて軟にして沈、細、これを按すれば指下にて絶せんと欲す」。(脈経)

「是を按せば絶えんと欲し、軟らかにして力なし。是れを候うに綿を按すがごとし。弱く按せばおぼえ、強く按せばなし、いかにもたよりなくして、有るがごとく、無きがごとし。……精気虚極して骨髓空虚し、一身痺疼」。(脈法手引草)

「脈の打ち方が軟らかで弱くて、沈である。気穴の不足による虚弱証に診られる」。(中国漢方医語辞典)

「細・沈・虚であり、精虚して筋萎の病歴を現わす。やはり低血圧者、無力体質者に診られる」。(鍼灸臨床新治療法の探究)

特に症例二の患者は、この脈状に加えて腹を診ると硬い。臍の周辺から腹全体が何か

塊があるように硬くなっている。

彼女は養殖業を営んでおり、何人も人を使っているが、元来、体が丈夫ではない上に、自分の体を顧みず、多忙につぐ多忙のため、神経をすり減らしてきた。その結果がこの腹部の硬化なのだろうと思っていた。しかし、何か腑におちなかった。

「凝集と発散をとおしておこる気体と液体と固体のあいだの状態の変化、それが気の運動のいちばん基本的なすがたである。人体でも、それを構成する気と外から摂取する気（息や飲食物）のあいだで、たえず三態間の変化がおこっている」（『中国医学はいかに作られたか』山田慶兒著）

この文章に出くわして、彼女のお腹が硬かった疑問が氷解した。気も滞ると、このように塊のごとく固体になってしまうのだ。しかし、この塊は一回の処置で軟化していった。

この主な処置とは「腹部瘀血処置」で、気の凝集が血も渋滞させていたのだろう。瘀血の流れを良くすることによって、気の塊も散っていったと思われる。

更年期障害は卵巣機能の女性ホルモンの低下であるが、ここで大事なのが、この女性ホルモンの分泌能の代わりにする副腎である。

この二人に共通する処置は「強心処置」（三陰交・陰陵泉・労宮）、「自律神経調整処置」はもちろんだが、「副腎処置」も加えていた。

「副腎処置」とは、副腎皮質あるいは髄質の機能亢進や低下を調整する処置法で、「照海」（復溜）、「兪府」、「京門」、「尺沢」等に留鍼あるいは雀啄を施してゆく。父（長野潔）は臨床の積み重ねによる経験則と学問の裏づけによって、副腎に着眼していった。

「鍼灸治療の立場からエストロゲンの分泌能をもつ副腎に刺激を与えることによって、それが可能であることは多くの臨床的治験例がそれを証明しているといえよう。……」（『鍼灸臨床新治療法の探究』）

この副腎が女性ホルモンの代わりをしている根拠になるのが、次の文献である。

「……性腺が脱落した更年期には副腎が活動するのです。副腎皮質の網状層という部分からアンドロゲンの分泌が次第に増加し、今までのエストロゲンに代わって脳下垂体前葉のゴナドトロピン過剰生産を抑制にかかります。

「……一時混乱におちいった内分泌系のバランスも副腎の救急処置によって再び静まり……一方副腎皮質からはエストロゲンも分泌されます」

これは昭和三〇年代に婦人科の臨床医である下村虎男氏が『更年期障害』（創元医学新書）の中で述べている。現在の解剖生理学書（例えば『体の構造と機能』等）でもこれを裏付けることが書かれている。